

ALL OUT WAR

村田ですよ！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※この作品に登場する国名や団体名、人物名などは実在のものと一切関係ありませ  
ん。

現実世界とは遠く離れたどこかの世界線の戦争の話です。  
架空国家とか架空兵器とかが多く登場するよ

目

次

第一話

死神

第二話

アルケー・システム

第三話

アナザー

11 7 1



# 第一話 死神

死神つてやつを、お前は見たことがあるか？

俺は死神など信じていなかつた。だが……出会つちまつたんだよ、絶対に存在しないと思つていた、『死神』つてやつに。

「くそっ！墜ちる！」

「ファルケン4、ロスト！つたく、味方が次々に墜ちて行きやがる！」

味方が次々に墜ちていつた。全員腕はあつた。

敵は一機だけだつた。俺は……あの機体の尾翼に描かれていた髑髏がトラウマになつた……あいつは、正に『死神』だ。

「君たちが新兵か。」

エメリア合衆国空軍では、新兵の入隊が行われていた時期だ。

「君たちは今日からこのドッグファイツシュ隊に入隊してもらう。」

「変な名前ですね」

新兵の一人が言つた。

「やっぱりそう思うかい。」

笑いながら隊長が言つた。

ロベルト「自己紹介が遅れたな。私はドッグファイツシユ隊隊長、ロベルトだ。よろしく頼む。」

こう見えても前の戦争の修羅場は潜り抜けて來たさ。お前らひよつこの面倒は見てやれるよ。」

では、そこの君から自己紹介を頼むよ。」

ドナルド「ドナルドであります。隊長が士官学校の軍曹のような人でなくて助かりましたぜ。」

ロベルト「へへッ、だが厳しいときは厳しいから覚悟しとくんだな。次は君だ、自己紹介をしてくれ。」

エミール「エミールであります。よろしくお願ひ致します。」

ロベルト「君はあるのロビ・エアクラフトの社長の息子か。」

なぜエメリシア軍に？」

エミール「…家柄で特別扱いしてくるような社会は嫌いだつたので。」

ロベルト「ガハハッ、軍では家柄なんてもんは関係ねえからな。」

⋮⋮つと、最後は君だな。」

ヴィーカ 「ヴィーカであります。

⋮ 皆様の足を引っ張らないよう頑張ります。」

ロベルト 「君はエメリシアでは珍しい女性パイロットになるな。

ドッグファイツシュ隊に女の子が来てくれるのは初めてだよ。」

ヴィーカ 「戦場では性別など関係ありませんよ」

ロベルト 「言つてくれるじゃないか。ところで、君は士官学校を満点で卒業したつて話だな。いい才能を持っているじゃないか。」

ヴィーカ 「才能なんてありませんよ、努力しただけです。」

ロベルト 「嫌いじやないぜ、そういうの。戦場では才能を過信したやつから死んでいくんだ。俺はそれを目の前で見て来たよ。」

自己紹介の後、隊員たちは軽い交流を行つた。

ロベルト 「ではドッグファイツシュ隊2番機をヴィーカ、3番機をドナルド、4番機を

エミールとする。あとでそれぞれの戦闘機も決めるからな。楽しみにしてろよ。」

その後の休憩時間、隊員達は各自的の時間を過ごしていた。

ドナルド 「やっぱり二番機はヴィーカだつたか。」

エミール 「彼女のこと知つてるのか?」

ドナルド 「小さい頃から仲が良くてさ、あいつは優等生だつたよ。」

エミール 「士官学校も満点だもんな。才能があるんだよ。」

ドナルド 「俺も最初はそう思つてたよ。確かにあいつには人並みの才能がある。ただ、あいつの凄さは才能なんかじゃない、努力さ。あいつは俺らが馬鹿なことやつてるときもずっと机に向かつてた。」

エミール 「なぜ空軍に来たんだろうな。」

ドナルド 「さあな。」

そんな話をしていると、滑走路に黒い死神のような機体が見えてきた。

ドナルド 「すげえな！ 新型機か？」

エミール 「ああ。Fu—43つて戦闘機だ。今武装を積んで最終飛行試験をやるんだと思うよ。」

ドナルド 「詳しいんだな。さすが社長の息子だ。」

次の瞬間、突然警報が鳴り響いた。

『国籍不明機が4機接近中！ 各員戦闘態勢！』

エミール 「試作機を狙いに来たか！」

ドナルド 「おいおいおいおい！ 今は他の機体も整備中で上がる機体はねえぜ！」

敵機 「ファルケン隊、今回の目標は敵航空基地の破壊だ。ついでに新型も破壊してやれ。オーバー。」

エメリア兵 「早く！あの新型で迎撃を！」

滑走路に轟音が鳴り響いた。敵が投下した爆弾が滑走路を火の海にした。警報が鳴り響く中、一人新型機へ走つていく影が見えた。

ドナルド 「おいおいおいおい！あれはヴィーカじやねーのか?!」

エミール 「嘘だろ！」

2人のところへ、ロベルトがやつてきた。

ロベルト 「ヴィーカ！無茶しやがつて！」

ドナルド、エミール！とつととハンガーへ向かうぞ！」

エミール 「機体はまだ整備中では？」

ロベルト 「流石に整備終わつてるのが一個ぐらいあるはずだ！」  
3人が走つている間に、ヴィーカは死神に乗り込んだ。

エメリア兵 「おい！あの新型を動かしてた馬鹿はどういつだ！」

ヴィーカ 「管制塔へ、ドツグフィツシユ2、ヴィーカ、出ます。」

管制塔 「悪いことは言わない！すぐにそいつから降りろ！」

周囲の制止も無視して、死神は空へと上がつた。

ドナルド 「あいつ……！パイロットスーツも着てないのに！」

エミール 「そもそもあの機体はピーキーなやつだ。操作できるとは思えないが。」

敵機「新型が上がったぞ！ ファルケン隊各機！ さつさと料理してやれ！」  
ヴィーカ（父さん… 私はやつてみせる。）

敵機「何だあの機動は！」

死神は、身をよじるように空を駆ける。

ヴィーカ（ロツクオンした… このボタンか？）

死神は無慈悲な弾丸を敵へと放つた。

「くそっ！ 墜ちる！」

「ファルケン4、ロスト！ つたく、味方が次々に墜ちて行きやがる！」

敵機「隊長！ 撤退しましょう！」

敵隊長「… やむを得ん。エメリシア軍の戦力を見くびっていたな。」

しつぽを巻くように、敵機は帰つていった。

## 第二話 アルケー・システム

ロベルト「おい！ヴィーカ！何やつてんだ！」

ロベルトが乗ったFu—4が、ヴィーカのFu—43へと近づく。

ヴィーカ「申し訳ありません」

ロベルト「その機体は危険なんだ！そんな機体に！」

ヴィーカ「……」

ロベルト「つ！……詳しい話は降りたあとでしよう。ともかく、無事でよかつたよ」

そのまま2機は消火が行われる滑走路へ着陸した。

ロベルト「げえつ……こんな騒ぎになるとはな」

エメリシア大統領の姿が、そこにはあった。

ロベルト「大統領と……おまけに国防長官まで……」

二人は機体を降りた後、黒服にエスコートされながら大統領の所へ向かった。

国防長官「ロベルト隊長……」

ロベルト「誠に……申し訳ありません……」

大統領「いや、そういう話ではないんだ。」

ロベルト「…！」

大統領「あの試作機は彼女にまかせてほしい。」

ロベルト「？：なぜ？：？」

国防長官「簡単だ。彼女が適任なんだよ、あの死神を任せることには。」

ロベルト「お言葉ですが、あの機体は貴方が想像するよりもずっと危険な機体なのです。前の紛争で私はそれを痛感しましたよ。私の戦友は、それで…。」

国防長官「その戦友とやらの娘なんだろ？ 彼女は。」

ロベルト「何つ…！」

国防長官「まあそういうことだ。これは合衆国の今後の為の”やむを得ない”決断なんだよ。では。」

ロベルト「…！」

護衛と共にその場を後にする大統領と国防長官を見送りながら、ロベルトはその場に立ち尽くした。

ヴィーカ「隊長。」

ロベルト「…？」

ヴィーカ「聞かせてください。貴方の戦友…いや、私の父の話を。」

ロベルト「…分かった。」

ロベルト「人の歴史は争いの歴史だ。我々人類は今まで数々の争いを経験してきたさ。その争いの中で、当然、戦場ではエースと呼ばれる、才能のあるやつと、才能の無いやつの2つが出てくるだろ？仮に、自軍の兵士が、全員才能のある奴だとしよう。そしたら、」

ヴィーカ「戦争に勝つのは簡単ですね。自軍側の戦死者も少なくなる。」

ロベルト「ああ。その通りだ。だから、エースを量産しようと、革新的な技術をいくつも投入したわけさ。その代表例が、あのFu-43にも、私の戦友であり、君の父でもある人が乗った機体にも組み込まれた、アルケー・システムだ。アルケー・システムはこれまでの戦争で集めた莫大なエース達のデータを基に、機体の操縦を補助するシステムだ。ただ、このアルケー・システムは、エース達の様々な思念なのか、そういうものまで具現化してしまう。パイロットは、そんな思念をずっと裏で聞かされ続ける。そして、それがずっと続くと、パイロットの精神はみるみるすり減り、最終的にはぶつ壊れちまうつて訳だ。私の僚機だった君の父も、それで廃人になっちゃってさ」

ヴィーカ「確かに……変な声が聞こえました。あの機体に乗っているとき、夢の中でうなされるような、そんな不安感を感じました。」

ロベルト「アルケーシステムは後世に残してはいけないシステムだ。だから君も、そこの機体に乗るのはよせ。」

ヴィーカ「……」

しばらくすると、また警報が鳴った。

《エメリシア軍施設が攻撃を受けている！ドッグファイツシュ隊は直ちに出撃せよ！》

ヴィーカはまた、あのFu—43のもとへと駆けていった。

ロベルト「おい待て……！」

ヴィーカはさつさとコックピットに乗り込んだ。

ヴィーカ「ゞ心配なく。私はシステムになど飲まれたりはしません。」

## 第三話 アナザー

ロベルト「ドッグファイツシュ1、ロベルト、出る！」

ヴィーカ「ドッグファイツシュ2、ヴィーカ、出ます。」

ドナルド「ドッグファイツシュ3、ドナルド、行きますぜ。」

エミール「ドッグファイツシュ4、エミール、出撃します。」

ドッグファイツシュ隊が全機、空へと上がつていった。

ドナルド「いいよな、ヴィーカは」

ヴィーカ「何が？」

ドナルド「そいつ、新型だろ？俺なんか渡されたのはオンボロだぜ？これでどうやつて戦えと？」

ヴィーカ「…」

エミール「おいドナルド、ヴィーカの機体は危険なんだぞ。」

ドナルド「んあ？どこがだよ？飛行中にクソを垂らせねえってことか？それなら俺のも同じだぜ？」

エミール「ロビ社と長い間関わってきたから言えるんだ。あの機体は…」

ドナルド「へつ、流石社長の息子さんだな。」

エミール「その言い方はよせ！」

ロベルト「喧嘩はよせよ。もうすぐ敵さんがお見えになる。」

そんな頃、AWACSからの命令が下された。

AWACS「こちらはAWACSホークアイ。ドッグファイツシユ隊はこれより本機の管制下に入る。」

ロベルト「久々だな、ホークアイ殿。」

ホークアイ「そうだな、ロベルト大尉。」

ロベルト「前の戦争で一緒に生き残ったんだ。安心して戦えるよ。」

ホークアイ「こちらもだ。ただ、そっちにはアルケーを積んだ機体もいるんだろう？」

ロベルト「ヴィーカか、」

ホークアイ「ヴィーカ……女か？まさか……」

ヴィーカ「貴方達の戦友の娘……と言えば良いでしようか。」

ホークアイ「やはりか。」

ロベルト（あいつと同じ道を辿らないことを願うが……ヴィーカ……）

ホークアイ「では戦況の説明と行こう。まず先程の不明機による攻撃はヴァールハイト國のものだと判明した。」

ロベルト「宣戦布告もなしに……か。」

ホークアイ「ああ。卑怯な連中だ。そして今、ヴァールハイトの連中はエース部隊をひっさげてロビ社の研究基地へ攻撃を仕掛けようとしている。」

エミール「たしかあそこにもアルケーを積んだ機体が……」

ホークアイ「君の言うとおりだ。あそこにはアルケーの試作機がまだある。万が一強奪でもされたら大変だ。死守してくれ。」

ロベルト「了解」

ホークアイ「指定空域に入った。作戦を開始せよ。」

狩りの始まりだ。

ドナルド「つしやあ！ やつてやるぜ！」

エミール「はしやいでるが撃墜されるなよ？」

ロベルト「おい！ 待て……これは！」

突然、ドッグファイツシユ隊の機体に異変が起ころる。

ロベルト「レーダーがロックされている……妨害電波か？」

エミール「敵のジャミングか！」

ホークアイ「いや、発信源は！」

敵機「ヘヘッ、強奪に偽装した譲渡とはね。」

敵機「ロビ社もやつてくれるじやないか。ね、グレーテ少佐。」

グレーテ「……何か裏がある気がするけど。」

ホークアイ「発信源はロビ社の施設だ！くそつたれ！」

ロベルト「譲渡しようつてのか……？」

エミール「クソ野郎！だからロビ社は嫌いなんだよ！」

ドナルド「おいおい、初陣からこれとはついてねーな。」

ロベルト「敵の隊長機、グレーテか？」

ヴィーカ「誰ですかそれ。」

ロベルト「最近ヴァールハイトで噂になつてんのよ。まるで機体を手足のように操れるんだつて。」

ヴィーカ「そんな人にアルケーが渡つたら……」

ロベルト「……エメリアはまずいかもな。」

ドッグファイツシュ隊の機体は全てジャミングされていてまともに戦えない。しかし  
その中でも敵機は容赦がない。

ロベルト「ケツにつかれたか！くそつたれ！」

ドナルド「撃つてこねえな……舐めてんのか？俺らを。」

ヴィーカ「レーダーが見えなくとも大丈夫ですよ。」

そうすると、ヴィーカが駆る死神は敵飛行隊の隊長、グレーの機体へと急加速した。

ヴィーカ「アルケーシステム……私に力を……！」

Fu—43「アルケーシステム、スタンバイ」

ヴィーカ「つ……！」

ロベルト「システムを過信するな！ システムの声に耳を傾けるな！」

グレー「何よあの機体！ あれがアルケーシステムなの？」

死神は、グレーの機体の後ろへと食らいつく。

ヴィーカ「レーダーが使えなくとも……！ 機銃なら……！」

たちまち、グレーの機体は蜂の巣となつた。

敵機「隊長！ 早くペイルアウトしてください！」

グレー「この私が……！」

グレーはペイルアウトした。

ヴィーカ「はあ……はあ……」

ロベルト「意識を保て！ システムに飲まれるぞ！」

ホークアイ「ジャミング装置のハッキングに成功した！ ジャミングを解除する！」

ジャミングが解除され、機体の異常はなくなつた。

ロベルト「レーダーが復活したか！」

敵機「おい！なんでロックオンされてるんだ！ジャミングしてくれるんじやなかつたのか？」

敵機「ぐわっ！」

ドナルドのミサイルが敵機に直撃した。

ドナルド「へへッ、俺のファーストキルだな。」

ロベルト「やるじやねえか。」

エミール「……！おい！下を見ろ！」

滑走路から飛び立つ、新型が見えた。

ロベルト「盗まれたのか……！もう1機の死神が……！」

ヴィーカ「迎撃します！」

ロベルト「アルケー同士でやり合うな！死ぬぞ！」

グレーテ「ベイルアウトした着地点にアルケーの機体があつたとはね……！反撃と行くわよ！」

二機の死神が、初めて敵対し合う。

ヴィーカ「アルケー！言うこと聞け！」

F u — 4 3 「アナザーを検知……」

ヴィーカ「いつもと動作が違う……！」

エミール 「始まつてしまつたか……」

ロベルト 「何が起こっている!?」

エミール 「アルケーシステムは、同じアルケーシステムを搭載したい機体”アナザー”の存在を検知すると……そのアナザーを潰す死神となるんだ。制御なんかできない。どちらかが死ぬまで暴走を続ける。」

ロベルト 「救う方法はないのか!?!」

エミール 「……無理があろうかと」

ロベルト 「クソつ！見殺しにするしかないのか！ヴィーカを！」

エミール 「あの死神達の間に割つて入る事も可能ですが……この機体では無理です。」

ロベルト 「くそつたれ！」

ヴィーカ 「何がアナザーだ！いくら拒否しても、お前は私の機体だ！私に従え！」

グレーテ 「フフフ……始めましょうか。死神たちのパーティーを。」